
里緒のカーニバル！！

むーぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

里緒のカーニバル！！

【Nコード】

N6473C

【作者名】

むーぶ

【あらすじ】

『自分にそっくりな人が3人はいる。これはそんな3人が出会ってしまっ！っ！って感じのお話です！』 by・リオ『リ、リオちゃん、真面目に説明してる！？』 by・里緒『驚いた顔の里緒も力ワイ〜！』 by・リオ

(前書き)

初めまして、むーぶです。ストレス発散のため小説を書いています。自分の書いた小説で一人でも笑ってくれる人がいたらとても嬉しいです。

自分にそっくりな人が三人は居る…そしてその、三人に会ったものは死んでしまう…

この物語は自分にそっくりな三人に出会ってしまった少女の話しである。

私の家に【もう一人の私】が来てからもうそろそろ一ヶ月がたつ…学校から帰って来ると私の部屋にあるベッドの上でもう一人の『私』が大口を開けて眠っていた。

毎度おなじみの光景なのでいつもの様に彼女を起こす。

「リオちゃん。またゲームやってたの？ も…そろそろ起きなよお。」

グラグラと体をゆすられて、ベッドの上の少女さうつすらと目を開けた。「里緒」。あと5分…5分だけ寝かせて…今日のおやつ半分あげるからあ。」

思いつきり起きぬけの声である。規則正しい里緒は9時に寝て6時に起きるといふ生活をしているのだが、リオはここ最近夜遅くまでレトロなゲームをやっている。

「パーティーが王子と王女だけってやつぱり微妙だよねえ。」

後から知ったのだが、昨日は2時までレベル上げをしていたらしい…「おやつ半分あげるって言っても、作るのは私でしょ！早く起きなよあ。」

「う…わかった。起きるよ…」

渋々とリオは顔を洗うため洗面所へと歩いていった。

「まったく、リオちゃんはあ。」

里緒が大きなため息をはいた。

この二人がすれ違ふとき世界中の誰もがどっちがどっちかわからなくなってしまうぐらい、この二人の顔立ちと同じだった。

寝ぼすけな彼女は『リオ』という名前の15歳の少女である。

性格はおおざっぱでおおらか。積極的に快活だが静かにしているととてもカワイイ顔立ちをしている。ちなみに髪は腰までのばしている。

もう一人の少女の名前は『愛川里緒』 15歳の高校一年生の少女である。

性格はおしとやかでおだやか。消極的で控え目だが、静かにしていてもとてもカワイイ顔立ちをしている。ちなみに髪は肩までのばしている。

顔のつくりも一緒。胸のサイズはリオの方が圧倒的に上である。しかしそれを言うと里緒が怒り出すので、あまり触れない様にしよう…

簡単に言えば顔はそっくりでも里緒はカワイイ系、リオはキレイ系ということだ

顔を洗って目が覚めたりリオは腰までのびた髪を二つに縛り、苺ジャムをぬった食パンを口にくわえて部屋に戻って来た。

「また食パンに苺ジャム？そんなのばかり食べてるとお肌荒れるよ。リオちゃん」

その質問にリオは突き出した指を左右に振りながら答える。

「ちっちっちっ。わかってないねえ〜里緒くん…最近の苺ジャムはねえ〜ビタミンの他にタウリン、コラーゲン、コエンザイムQ10をふんだんに含んでいて、美容の他に滋養強壮、果てはガン予防にも役が立つように品種改良されているのだよ。」

学者の様に饒舌な話しっぷりだった…

「そんな訳無いでしょ！それに私が言いたいのは【朝昼晩、ジャムとトーストと牛乳だけで一ヶ月！！】なんて食生活だと体に悪いって事なのっ！」

リオが家に来てからというものの、里緒のツツコミの間の取り方はプロの領域へと足を踏み入れ始めている…

リオの突き出したままの指がもう一度左右に振れる。

「ちつつちつつ。わかってないねえ。里緒くん。最近の食パンはねえ。完全栄養食品へと進化し、ミネラル、タンパク質をふんだんに含んでいて、味も食パン味にとどまらず、うどん味、カレー味、ロイヤルミルクティー味などたくさんの種類が製造されているのだよ。」

「少し前に聞いたようなセリフだった。」

「あれ。デジャヴ？ じゃなくてえ！食パンは所詮食パンでしかないからっ！」

「それは全国の食パン製造会社への宣戦布告と考えるとよろしいのかな？」

リオが悪い笑顔で答えた。

「……………」

「ゴメン。リオが悪かったから、せめて会話して」

「リオのばか……」

里緒は唇をとがらせて小さく怒った……

《私たちの出会いは一ヶ月前。人々が気付いたり気付かなかったりしながら、世界には『傷』というものが生まれているの……

『傷』とは時間・次元の切れ目の様なもので、向こう側は違う時間・違う次元と繋がっているの。『傷』は近くにある何かを引きずり込むと閉じてしまうので、あまり危険でもないんだけど……

そういえば、世界に存在する。【その時代に存在しなかった物】「オパーツ」って『傷』によって迷い込んだ他の世界の物なのかも……

私の隣りで鼻水とか涙とか流しながらオロオロしているリオは違う世界の住人で、私と同じ存在だったの……

ある日『傷』に吸い込まれて私の部屋に降って来たんだけど……その代わりに私のポテチ（のり塩味）が傷の中に吸い込まれちゃったんだよね。》

以上回想終了。横をみると、さっきまで泣いていた『私』がベツ

トの上で漫画読みながら笑っていた。

「ねえ、リオちゃん最近『傷』多いよね？」

「まあ、テキトーな物ほうり込めば、『傷』も閉じるからいいんじゃない？」

リオがテキトーに答えてきた。

「テキトーって…リオちゃんはもう元の世界に帰れないかも知れないんだよ？」

不覚にも里緒はちょっとだけ涙ぐんでしまった。

「うーん…普通こういう展開の物語って、お互いの事好きになったときに限って元の世界への道が開いたりして涙をこらえつつも笑顔で元の世界に変えるんだろっけど…」

ちよこちよこリオの世界と繋がってる『傷』が開いたりしてるからいつでも帰れるんだよね。」

苦笑い…

里緒の目からこぼれ落ちそうな涙は重力に逆らいながら、とてつもない速さでひっこんだ。

「えっ、何？そんなパターン？」

「それにリオはいつでも里緒の事好きだしねえ」

「…ちよつと素敵な事言ってるんだろっけど、なんでそんな事言いながら私をベットに押し倒してるの？」

体勢的に馬乗りというやつだった。

「いつ帰っても良いように心残りを無くそうと…」

これが、リオの悪い癖だ…

リオは類い稀なる女好きである。もちろん里緒にはそんな特殊な性癖はない。

押し倒されたり、キスをせがまれるのは軽い方だ。ひどい時には首筋を舐められたり、布団の中に入って来て既成事実を作ろうとする…

本当苦労が絶えない。

「里緒お」

「頭の上にハートマークがたくさん舞ってるよ。リオちゃん…」

「んちゅ〜」

毎日が貞操の危機である。

とりあえず、リオに顔面パンチをくらわせようと里緒は右の拳を強く握りしめた。

…しかし、この時部屋の片隅で『傷』が開いた事に二人は気が付いていなかった。

(後書き)

実はこの作品の前に投稿した作品があったのですが、間違って削除してしまい、そのショックから次の小説を書くのに何ヶ月も掛かってしまいました。前の作品『零課出動!!』を読んで下さった方がいたら連絡下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6473c/>

里緒のカーニバル！！

2011年1月20日00時12分発行